

抽象概念を表す漢語名詞に付随する意味的韻律

明星大学 情報学部 情報学科
大石 亨

1 はじめに

人間の世界認識において、カテゴリー化が重要な役割を果たしていることは、あらためて論じるまでもないだろう。人間は、世界を、互いに特定の関係を結んだ無数の個々別々の事物からなるものとして認識するのではなく、なんらかの性質を共有し、規則的な振る舞いをするカテゴリーという観点から理解するように進化してきた。これによって、人間は、環境を予測し、制御することができるようになったのである。

認知言語学においても、Lakoff(1987)やTaylor([1989] 2004)をはじめとして、アリストテレス以来の古典的カテゴリー論と対比する形で、プロトタイプカテゴリーの重要性が指摘されてきた。Lakoff(1987)の第1章は、「カテゴリー化の重要性」という見出しである。それに続く第2章ではウィトゲンシュタインからロッシュに至るカテゴリー研究の歴史が紹介されるのであるが、その冒頭では、「家族的類似性」や「成員の段階性」「概念の身体化」などの主要なテーマが、あらかじめ列挙されて簡単に説明されている。その中で、「基本レベルカテゴリー」の概念は、以下のように紹介されている。

基本レベルのカテゴリー化：カテゴリーは単にもっとも一般的なものからもっとも特殊なものに至る階層構造を成して組織されるだけでなく、認識する上で、より基本的なカテゴリーが、一般的なものから特殊なものに至る階層構造の「中心」にくるように組織されているという考え方。一般化は階層構造を基本レベルから「上方へ」と進み、特殊化は「下方へ」と進む。(池上他訳, p.14)

ここでは、カテゴリーがタクソノミー的な階層構造を成して組織されていることが前提とされている。この自明視されているカテゴリーの階層構造こそ、素性に基づく古典的カテゴリー観の主要な動機付けを与えたものである。すなわち、階層構造の垂直軸を「下方へ」進むにしたがって、各々のカテゴリーは、「上位の」カテゴリーが持つと同じ素性に加えて、一つ(あるいはそれ以上の)付加的な識別素性を有しているという見方である。

このカテゴリーの階層構造に関する古典的な素性モデルは、さまざまな事実によって批判されるわけであるが、概念が一般化と特殊化による体系的な階層構造を有すること自体が否定されるわけではない。むしろ、概念を一般化・抽象化してスキーマを作成する能力は、構文ネットワークを構成し、あらゆるレベルで言語表現の存在を動機付けるものとして重要視されている。ただ、その階層構造は、素性モデルが前提としているような、融通のきかない硬直したものではなく、絶えず変化する環境に適応できるだけの柔軟性とダイナミックな可変性を有しているということである。

本稿の研究対象は、「物質」や「行為」など、このカテゴリーの階層構造の最上位に位置すると考えられる抽象概念を表す漢語名詞である。プロトタイプカテゴリーが柔軟性を持っているとはいえ、カテゴリー体系全体の構造は比較的安定しているはずである。さもなければ、人間の言語はまったく相通しないものになってしまうだろう。

一般化によって、基本レベルカテゴリーから「上方に」遡っていくとき、そこには明確に区別される複数の終着点があり、日本語には、それぞれを指示する「もの」「こと」「ところ」などの総称的な和語名詞に加えて、「物質」や「行為」など、以下で論じるような複数の漢語名詞が存在している。

論理的に考えると、これらの抽象概念は下位概念のすべてを包含するはずであるから、それを表す名詞も、意味的には透明であり、中立的に用いられてしかるべきである。しかし、大規模なコーパスを調査した結果は、全くこの予想を裏切るものであった。3節で述べるように、これらの漢語名詞の多くは、その名詞と共起する語に極端とも言うほどの意味的な偏りが見られたのである。

このように、一見中立的な意味を持つ語と共起する語彙に、(多くは価値評価的な)意味の偏りが見られる現象は、コーパス言語学の分野で「意味的韻律」(semantic prosody)¹と呼ばれている(Louw 1993, Stubbs 1995, Partington 1998, Sinclair 1996, Hunston and Francis 1999)。これは、大量の電子化データが蓄積され、その中から特定の語の使用例を即座に取り出すことができるコンコーダンスソフトが開発されたことにより、

はじめて明らかになった現象である。

次節では、調査対象としたコーパスの概要と、取り上げた漢語名詞および共起語の選択方法を説明する。3節は、調査結果である。3.1節では、「行為」「行動」「活動」「動作」という、行いや振る舞いを表す漢語名詞の共起語彙を調査した結果を述べる。3.2節では、「現象」「事態」「状況」「状態」という、出来事や有り様を表す漢語名詞を取り上げる。3.3節では、「物質」「物体」「事物」「存在」というモノを表す漢語名詞について論ずる。4節でこれらの現象をもたらず共通の原因を考察し、背後に存在する認知的なメカニズムを明らかにする。

2 調査対象

本研究で使用したコーパスは、大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所において構築されている『現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)』のうち、著作権処理が済んだサンプルについて、学術研究利用に限定して公開されているデータの2009年度版である。2009年度版モニター公開データの内容は、書籍・約3,000万語(10,423サンプル)、白書・約480万語(1,500サンプル)、Yahoo!知恵袋・約520万語(45,725サンプル)、国会会議録・約490万語(159サンプル)である(国研2009)。

データと同封して、同研究所によって作成された全文検索システム「ひまわり」(山口2007)も配布され、上記のサンプルデータをまとめて検索することができる。検索結果には、検索対象語、前文脈、後文脈、書誌情報、著者情報等が表示され、検索には正規表現を使用することもできる。

調査は、個々の漢語名詞ごとに、「ひまわり」で全文検索を行った後、形態素解析ソフト「茶筌」(松本他2003)で前文脈10文字を形態素解析し、以下で述べる品詞に該当するものを抽出し²、集計した。

表1に、本研究で調査した語彙の一覧とコーパス中の全出現頻度、および当該語彙の直前に出現した名詞、形容詞、形容名詞の頻度(延べ語数)を示す。ここで、「形容名詞」と呼んでいるのは、国語学の伝統では「形容動詞」と呼ばれてきたものであり、「きれい」「静か」などが「な」を伴って名詞を修飾する語彙カテゴリーである。上原(2007)は、日本語の品詞構造に認知言語学的考察を加えているが、形容名詞(いわゆる形容動詞)が語根の拘束性や形態的有標性の観点から、動詞よりは名詞に近いものであること、むしろ動詞と

形容詞が「活用詞」という一つのカテゴリーの下位カテゴリーであるのに対し、形容名詞は名詞やサ変名詞とともに「非活用詞」というカテゴリーを構成しているという説得力のある議論を展開している。さらに、形容詞 vs. 形容名詞、動詞 vs. サ変名詞という対立が、それぞれ属性概念と行為概念の基本 vs. 非基本という関係になっていることも指摘している。これは、基本的にそれぞれの語源が和語 vs. 漢語/外来語の関係になっていることと関連するものであり、外来語由来の新語彙が即座に基本語彙とはならないことや、動詞と形容詞の活用の拘束性が新語の加わりにくさをもたらすことから説明される。

さて、本稿の調査対象は漢語名詞であるから、直前に共起して複合名詞を構成する名詞も漢語であることが多い³。また、述定機能を基本とし、新語の加わりにくい、閉じた(closed class)カテゴリーを構成する動詞や形容詞とは対照的に、名詞と形容名詞は、指示機能を基本とするとともに、比較的多様性に富むカテゴリーでもある。

以上のことから、本稿では、表1に挙げた漢語名詞の直前に出現する名詞および形容名詞のみ、すなわち「非活用詞」に着目することにした。構文文法的に言えば、[[...]_{(A)JN}[調査対象語彙]_N]_{NN}という複合名詞構文と、[[...]_{AJN}な[調査対象語彙]_N]_{AN}という「な」連体修飾構文の構文的意味(constructional meaning)を考察するということになる⁴。なお、「な」連体修飾構文の一般的な意味構造については、上原(2007)の143ページにLangacker流の図が掲載されている。

表1 調査対象語彙と出現頻度

対象語彙	総数	直前品詞			
		名詞	形容詞	形容名詞+な	
おこない	行為	6,938	3,456	74	245
	行動	7,164	1,825	123	290
ありさま	活動	15,064	9,427	79	270
	動作	1,044	145	24	46
もの	現象	2,653	914	44	112
	事態	2,756	407	78	168
合計	状況	16,319	5,959	521	498
	状態	9,457	2,827	437	427
	物質	3,528	2,187	26	74
	物体	292	14	18	7
	事物	310	21	5	12
	存在	10,730	847	318	335
合計	76,255	28,029	1,747	2,484	

3 調査結果

3.1 「行い」を表す漢語名詞

本節では、「行為」「行動」「活動」「動作」の4語について、その直前に出現した名詞および形容名詞を示す。表2には、複合名詞構文に出現した頻度上位の25語を、表3には同じく「な」連体修飾構文に出現した頻度上位の20語を記載した。カッコ内の数値は出現頻度である。

表2 「行い」を表す漢語名詞の直前に共起して複合名詞を構成する頻度上位の25語

「行為」	「行動」	「活動」	「動作」
不法(204)	問題(103)	経済(412)	生活(17)
違法(143)	軍事(67)	ポランティア(328)	基本(11)
違反(133)	企業(56)	生産(286)	拳措(3)
行政(122)	性(45)	事業(263)	スナッフ(3)
性(119)	消費(43)	研究(237)	異常(3)
共同(108)	人間(32)	啓発(185)	基本的(2)
争議(98)	自由(29)	企業(174)	協調(2)
暴力(95)	生活(26)	広報(154)	浮上(2)
不正(72)	抗議(25)	教育(153)	補助(2)
労働(64)	共同(24)	救助(146)	手話(2)
法律(62)	防止(22)	維持(143)	投球(2)
開発(55)	交通(22)	奉仕(120)	安定(2)
犯罪(55)	集団(22)	就職(118)	削除(2)
医療(49)	投資(19)	警察(115)	移動(2)
負担(47)	主張(18)	防災(111)	保持(2)
不良(36)	購買(18)	社会(110)	パワー(2)
相互(33)	準備(18)	文化(108)	言語(2)
自殺(33)	動物(18)	消防(103)	日常(2)
国事(32)	社会的(17)	営業(93)	準備(2)
移転(32)	登校(17)	学習(92)	アテトーゼ型(1)
残虐(31)	防犯(17)	政治(84)	吸収(1)
暴走(31)	旅(17)	スポーツ(83)	意識的(1)
寄附(31)	異常(16)	支援(71)	補正(1)
テロ(29)	作戦(16)	相談(70)	起居(1)
逸脱(28)	逸脱(16)	開発(66)	直接(1)

表2の1列目に太字で示したように、「行為」の直前には、「不法」「違法」「違反」「争議」「不正」「犯罪」「不良」「自殺」「残虐」「暴走」「テロ」「逸脱」など、なんらかの《不法性・違法性》を表す(形容)名詞や、「性」「暴力」など《社会的タブー》を表す名詞が数多く出現している。これらは、いずれも負の評価の意味を帯びた語である。他にも、

「加害」(21)、「不貞」(19)、「海賊」(18)、「迷惑」(18)などの語が共起している。頻度上位でこの例外と考えられる「行政行為」という語は、122例のうち、『行政法』『行政法要論』という2冊の書籍に105例(86%)が集中して出現している。同様に、「共同行為」も、108例中99例(92%)は『公正取引委員会年次報告：独占白書』で使用されたものである。また、「労働行為」は64例中63例が「不当労働行為」が分割されたものであった。

「法律」「開発」「負担」「国事」など、頻度上位で否定的な意味を伴わない名詞の多くは、法律や行政の分野で用いられる専門用語である。

表3 「行い」を表す漢語名詞を「な」連体修飾構文で修飾する頻度上位の20語

「行為」	「行動」	「活動」	「動作」
不当な(20)	適切な(17)	活発な(39)	自然な(4)
違法な(14)	不審な(12)	主な(22)	緩慢な(3)
危険な(13)	危険な(10)	さまざまな(22)	奇妙な(3)
正当な(12)	勝手な(10)	様々な(20)	複雑な(2)
わいせつな(9)	大胆な(8)	自由な(19)	必要な(2)
さまざまな(9)	異常な(8)	いろいろな(15)	単純な(2)
必要な(9)	必要な(7)	多様な(15)	敏捷な(2)
愚かな(6)	不適切な(6)	機敏な(6)	遅鈍な(1)
野蛮な(5)	慎重な(6)	新たな(10)	正確な(1)
新たな(5)	不可解な(6)	重要な(7)	身軽な(1)
残虐な(5)	自由な(5)	コミュニケーション(7)	ふうな(1)
悪質な(5)	迅速な(5)	主要な(7)	華やかな(1)
残酷な(4)	果敢な(5)	地道な(6)	わずかな(1)
単純な(4)	さまざまな(5)	多彩な(5)	ユーモラスな(1)
不正な(4)	いろいろな(5)	広範囲な(4)	シンプルな(1)
無謀な(4)	奇妙な(5)	熱心な(4)	異様な(1)
重要な(3)	的確な(4)	ユニークな(3)	異常な(1)
性的な(3)	旺盛な(4)	適正な(3)	ランダムな(1)
軽率な(3)		ダイナミックな(3)	スピーディな(1)
いろいろな(3)		危険な(3)	不自然な(1)

同じことが、複合名詞構文だけでなく、「な」連体修飾構文についても言える。表3の1列目には、「不当な」「違法な」「危険な」「わいせつな」「愚かな」「野蛮な」「残虐な」「悪質な」「残酷な」

「不正な」「無謀な」などのやはり《不法・違法性》を含んだ表現が並んでいる。

一方、「行動」を主辞とする複合名詞にも「問題」「異常」「逸脱」などの《異常性》を表す否定的なニュアンスを持つ語が含まれてはいるが、どちらかといえば、「軍事」「企業」「消費」「生活」「抗議」「共同」「集団」「投資」「購買」など、集団としての人間が行う軍事・経済等に関する価値的には中立な語が多い。「な」連体修飾構文においても同様に、「不審な」「危険な」「勝手な」「異常な」「不適切な」「不可解な」「奇妙な」のように、《異常性》や《怪しさ》を表す表現が共起しているが、「適切な」「大胆な」「必要な」「機敏な」「慎重な」「自由な」「迅速な」「果敢な」「的確な」「旺盛な」のように、《適切性》や《勇敢さ》、《自由》などの肯定的意味を帯びた表現も同程度以上に出現している。

これに対して、表2の「活動」の列には、「経済」「事業」「企業」などの経済活動や、「研究」「文化」「スポーツ」などの教育研究・文化活動に加えて、網掛けで示したように、「ボランティア」「啓発」「救助」「奉仕」「防災」「支援」など、社会的に役に立つ有意義な行動を表す語彙が多いことがわかる。表3の形容名詞でも、網掛けで示した「活発な」「コミュニカティブな」「熱心な」「ダイナミックな」といった《活発さ》を表す語彙が、「主な」「主要な」「重要な」という《主要性》を表す語彙や、「さまざまな」「様々な」「いろいろな」「多様な」「広範囲な」「広範な」といった《多様性》を表す表現とともに、多く用いられている。《多様性》以外は、いずれも肯定的な意味合いを含んだ語彙である。

また、「動作」については、抽象的な行為よりは、身体や機械・システムの具体的な動きに対して用いられることが多く、特に評価的に偏って用いられることはない。

『岩波国語辞典 第7版』(西尾他編2009)によると、「行為」の意味として、「おこない。ふるまい。特に、しようという意志をもってする行い」とあり、「行動」の補足的説明に「行為と区別する場合は、無意識的動作を含めて言う」と記載されている。「活動」には「働き動くこと。活気をもって、または積極的に働くこと」という語義が、「動作」には「それをする体の動き・働き」という語義が、それぞれ与えられている。

また、最近出版された『日本語語感の辞典』(中村2010)では、「行為」の語義として、「意思を持って行うことをさし、改まった会話や文章に用い

られる正式な感じの漢語」とあり、「行動」に対しては「実際に体を動かして意図的に行う行為の意で、やや改まった会話や文章に用いられる漢語」という語義が記載されている。くわえて、「行動」の項には「指を曲げたり目を開けて物を見たりするような些細な動きの場合は、『行為』のほうが一般的で、『行動』といっても誤りではないがなじみにくい」という解説があり、『岩波国語辞典』とは異なる説明が与えられている。「活動」には「活発な動きをさして、会話にも文章にも使われる日常の漢語」という語義が、「動作」には「行動における体の動きの意で、会話にも文章にも使われる日常の漢語」という語義がそれぞれ記載されている。さらに、「動作」の項には、「一定の目的を達成するための『行為』『行動』に比べ、そのうちの個々の動きをさすイメージがあり、無意識の動きの場合をも含む」という説明がある。

どちらの辞書でも、「動作」が他の3語とは異なり、具体的な体の動きを表すことは適切に捉えられているが、「行為」と共起して複合名詞や修飾構文を構成する名詞や形容名詞に《不法性》を表す否定的な意味合いを持つものが多いことや、逆に、「活動」と共起する語彙に《社会的貢献》を表す肯定的な意味を持つものが多いなどの記載はなく、これらの現象が人間の直感ではとらえにくいものであることがわかる。

3.2 「出来事・有り様」を表す漢語名詞

出来事や有り様を表す漢語名詞については、「現象」「事態」「状況」「状態」の4語を調査した。これらの漢語名詞の直前に共起して、複合名詞を構成する語の頻度上位20語を表4に示す。

表4の1列目は、「現象」と共起する名詞であるが、上位には、「自然」「社会」「生命」「精神」「物理」「生理」「病理」など、一般的な現象をタクソノミーとして分類したときの、一段階下位のカテゴリー名を表示するために必要な語が並んでいる。このうち、「生理現象」は、排泄などの身体機能の婉曲表現としても用いられる。

それ以外には、「超常」「心霊」「霊」など、最近のオカルトブームを反映した語や、「逆転」「老化」「液化化」などの変化を表す語が現れている。

2列目の「事態」の共起名詞の上位5語は、「緊急」「非常」「周辺」「異常」「攻撃」であり、差し迫った状況を述べるためにこの語が用いられることが非常に多いことがわかる。そうではない平穏な状態や、普段と変わらない定常状態は、そもそも「事態」ではないのである。

3 列目の「状況」と共起する名詞の上位 5 語は「実施」「発生」「処理」「利用」「整備」であり、4 列目の「状態」と共起する名詞の上位 5 語は「健康」「精神」「経営」「心理」「経済」である。これらは、何の状況や状態なのかを具体的に示すための語であり、「状況」は外的なものに、「状態」は内的なものに用いられるという違いがあるが、いずれも変化してゆくものであるという点に特徴がある。これに加えて、「状態」には、「興奮状態」「緊張状態」「パニック状態」などのように、変化の結果、どのような状態になっているかを描写するための語も共起している。

表 4 「出来事・有り様」を表す漢語名詞の直前に共起して複合名詞を構成する頻度上位の 20 語

「現象」	「事態」	「状況」	「状態」
自然(82)	緊急(124)	実施(348)	健康(128)
社会(43)	非常(67)	発生(337)	精神(107)
生命(27)	周辺(54)	処理(204)	経営(49)
精神(23)	異常(35)	利用(190)	心理(46)
超常(16)	攻撃(22)	整備(157)	経済(44)
心霊(15)	侵略(7)	被害(146)	栄養(42)
物理(14)	不況(6)	検挙(146)	興奮(36)
逆転(13)	六条(5)	財政(142)	財政(33)
老化(13)	五条(3)	経済(132)	緊張(32)
前兆(11)	最悪(3)	進捗(130)	定常(31)
病理(11)	本(2)	達成(95)	パニック(30)
流行(11)	人道的(2)	設置(93)	横ばい(29)
生理(10)	重要(2)	経営(83)	戦争(29)
気象(10)	弾劾(2)	活動(75)	自然(26)
液化状(10)	新(2)	就職(68)	極限(26)
霊(9)	個人(1)	普及(67)	錯乱(24)
社会的(8)	制圧(1)	社会(64)	混乱(24)
政治(8)	店(1)	財務(56)	昏睡(24)
エルニーニョ(8)	主義的(1)	分布(51)	仮死(24)
Uターン(8)	嫌悪(1)	危機的(49)	植物(24)

これに対して、「な」修飾構文に出現する形容名詞には、興味深い意味的な偏りがみられる。表 5 に頻度上位の形容名詞 15 語を示す。

表 5 の 1 列目に太字で示したように、「現象」の列には、「不思議な」「複雑な」「奇妙な」「異常な」「摩訶不思議な」「不可能な」「不可思議な」「奇異な」「不可解な」など、《不思議さ》や《理解不可能性》を表す語と、「異常な」「病的な」「霊的な」

「特殊な」といった何らかの《異常性》を表す語が多い。

これに対し、「事態」「状況」「状態」の 3 語は、網掛けで示したように、いずれも「深刻な」「困難な」「悲惨な」「大変な」「異常な」という語を共通して含んでおり、他にも「不幸な」「遺憾な」など、《深刻さ・困難さ》といった否定的な意味を持つ語が多いことがわかる。

表 5 「出来事・有り様」を表す漢語名詞を「な」連体修飾構文で修飾する頻度上位の 15 語

「現象」	「事態」	「状況」	「状態」
不思議な(20)	深刻な(33)	困難な(73)	危険な(42)
複雑な(11)	重大な(20)	深刻な(49)	不安定な(22)
さまざまな(8)	大変な(15)	大変な(32)	困難な(21)
いろいろ(7)	異常な(14)	悲惨な(23)	困難な(19)
皮肉な(6)	不幸な(12)	不健全な(22)	悲惨な(19)
奇妙な(6)	困難な(8)	危険な(18)	正常な(19)
異常な(4)	悲惨な(6)	いろいろ(17)	良好な(16)
顕著な(4)	遺憾な(5)	不安定な(15)	深刻な(13)
摩訶不思議な(3)	新たな(4)	不健全な(15)	大変な(13)
不可能な(2)	緊急な(3)	不利な(14)	異常な(12)
不愉快な(2)	いろいろ(3)	異常な(14)	健康な(10)
病的な(2)	さまざまな(3)	特殊な(12)	可能な(9)
霊的な(2)	残念な(3)	新たな(10)	不可能な(9)
特殊な(2)	奇妙な(3)	有利な(9)	健全な(7)
不可思議な(2)	たいへんな(2)	特異な(9)	完全な(7)
		必要な(8)	きれいな(6)

先に、「事態」は差し迫った状況を表現するための語であると述べたが、言語化すべき差し迫った事態とは、突然降りかかってくる不幸であることが多い。工学的情報量の理論を持ち出すまでもなく、平穏で穏やかな定常状態にはニュースとしての価値があまりないからである。一般に、人間はこのような異常で予測不可能な事態を嫌うために、否定的なニュアンスを伴う語が多いものと考えられる。

また、「状況」や「状態」は変化しうるものを指示すると述べたが、「状況」と共起するほとんどの形容名詞が描写しているのは、これらが悪化したときの状態である。これも同様に、「定常状態は言

及不要」という語用論的原則によって説明できるだろう。ただし「状態」は、「正常な」「良好な」「健康な」「健全な」「完全な」「きれいな」のように肯定的な語彙とも共起している。これは、内的な状態は外的な状況とは異なり、自らコントロールできる可能性が高いからと考えられる。

『大辞林 第二版』(松村編 1995)には、「事態」の意味に「事のありさま。成り行き。多く、深刻で好ましくない状態をいう。」とあるが、「状況」や「状態」の項目にはそのような使用傾向に関する記載はない。

『日本語語感の辞典』(中村 2010)では、「事態」の説明に「『状況』などと違い、人間そのものの様子には用いない。」とあり、「状況」の項には「『状態』よりも動きを感じさせ、また、周囲との関係でとらえた意味合いが強い。」との記載がある。また、「状態」の項には、「『状況』が対象のおかれた周囲の様子を含めて問題にするのに対し、この語はそのもの自体の様子を問題にしている。」とあり、それぞれの語感の違いをよく捉えているが、これらの語と共起する形容名詞に共通して見られる否定的な意味合いについての言及はなく、少数の例文から間接的にうかがえるのみである。

3.3 「モノ」を表す漢語名詞

モノを表す漢語名詞については、「物質」「物体」「事物」「存在」の4語を調査した。表6に、複合名詞構文に出現した頻度上位20語を表7に、「な」修飾構文に出現した頻度上位20語をそれぞれ示す。ただし、「物体」と「事物」は出現頻度が低く、共起語が20語に満たない。

表6の1列目に太字で示したように、「物質」と共起し、複合名詞を構成する名詞の頻度上位には、「化学」「放射性」「有害」「汚染」「核」「原因」「規制」「汚濁」「発がん」など、人体や環境にたいする《有害性》を含意する語が並んでいる。「化学物質」は、必ずしも人間に悪影響をもたらすばかりとはいえないが、1992年に国連環境開発会議(いわゆる地球サミット)において、環境問題の一つに位置づけられている。

「核物質」や「放射性物質」に加えて、「燃料物質」は80例すべてが「核燃料物質」が分割されたものであり、「原料物質」も、2例を除いて18例が「核原料物質」である。これらの物質には、放射能が目に見えないという不気味さにくわえて、被爆国の人間として特に否定的な印象がまとわりついている。

「抗生物質」や「(神経)伝達物質」など、医

学・薬学分野で用いられる専門用語は例外であるが、一般に、自然科学分野で用いられる専門用語には意味的韻律が付随しにくいということは、従来から指摘されていることである(Stubbs 2001, Hunston 2007)。

一方、表7の1列目は、「物質」を「な」連体修飾構文で修飾する形容名詞である。第1位には、やはり「有害な」という《有害性》そのものを表す語がランクされているが、それ以下には《有害性》を表す語はほとんどない。用例数が少ないこともあるが、どのような害があるのかが、形容名詞を使い分けるほど具体的にわかるのであれば、「物質」という抽象名詞を使用する必要はないのかもしれない。

表6 「モノ」を表す漢語名詞の直前に共起して複合名詞を構成する頻度上位の20語

「物質」	「物体」	「事物」	「存在」
化学(487)	不可能(3)	外的(6)	人間(59)
放射線(193)	飛行(3)	自然的(5)	現(52)
有害(166)	霊的(1)	空間(2)	社会的(37)
抗生(131)	対象(1)	感覚的(2)	中心的(30)
汚染(128)	無限(1)	日本(1)	自己(24)
伝達(118)	精神的(1)	感性的(1)	複数(15)
核(98)	実(1)	客観的(1)	活動的(13)
燃料(80)	低温(1)	歴史的(1)	自立(11)
粒子状(55)	高熱(1)	物理的(1)	中核的(10)
原因(50)	感覚的(1)	人間的(1)	他者(10)
規制(42)			抗弁(10)
原料(20)			象徴的(8)
汚濁(18)			現実(8)
当該(15) ⁵			草分け的(8)
有機(14)			例外的(5)
2(14)			独(5)
地殻(13)			身体的(5)
植(12)			目的的(5)
発がん(12)			リーダー的(5)
対象(11)			世界内(4)

2列目の、「物体」と共起する名詞は少ないが、「不可能物体」「(未確認)飛行物体」など、得体の知れないものを指示するために用いられている。形容名詞では、「邪魔な」「奇怪な」「異様な」「不気味な」など、やはり不快な感情を伴い、《わけのわからなさ》を表す語が現れている。これは、これらの概念の抽象性そのものに起因するものであ

ると考えられる。抽象的であるということは、情報量が少ないということであり、このような語彙を用いざるをえない状況とは、伝えるべきものについて、話者が十分な情報を持っていない状況である。この《得体の知れなさ・わけのわからなさ》が、その物質や物体に対する否定的な価値評価に結びつくものと思われる。

「事物」については、内的観念に対する「外的事物」等、哲学用語として用いられているほか、「～的」という漠然とした捉え方が特徴であり、形容名詞では「さまざまな」「いろいろな」「広範な」「無関係な」「雑多な」などが共起し、《雑多性》とでもいうべき性質を表している。

表 7 「モノ」を表す漢語名詞を「な」連体修飾構文で修飾する頻度上位の 20 語

「物質」	「物体」	「事物」	「存在」
有害な(9)	巨大な(2)	さまざま	身近な(23)
必要な(6)	異様な(1)	な(7)	重要な(15)
不要な(4)	純粋な(1)	無関係な	危険な(14)
いろいろな(4)	不気味な(1)	(1)	貴重な(12)
微小な(3)	邪魔な(1)	いろいろな(1)	特別な(11)
さまざまな(3)	奇怪な(1)	雑多な(1)	大切な(10)
重要な(2)		新たな(1)	不可欠な(9)
不可欠な(2)		広範な(1)	異質な(9)
大切な(2)			特異な(9)
新たな(2)			邪魔な(8)
不安定な(2)			自由な(7)
豊かな(2)			巨大な(7)
危険な(2)			圧倒的な(6)
安定な(2)			厄介な(6)
様々な(2)			やっかいな(6)
不透明な(1)			邪悪な(4)
十分な(1)			迷惑な(4)
主な(1)			不思議な(4)
透明な(1)			ユニークな(4)
安全な(1)			マイナーな(4)

一方、「物体」とは逆に、「存在」と共起する名詞には肯定的な意味を持つものが少なくない。「人間存在」「現存在」などは、哲学・宗教用語であるが、網掛けで示したように、「中心的」「中核的」「象徴

的」「草分け的」「リーダー的」等、《中心性・代表性》を表す用法が多いことがわかる。形容名詞でも、網掛けで示したように、頻度上位には「身近な」「重要な」「貴重な」「特別な」「大切な」「不可欠な」などの肯定的な語が並んでいるほか、「異質な」「特異な」「邪魔な」「巨大な」「圧倒的な」「ユニークな」など、《特異性》を表す語が多い。これは、「存在」という語が、「物質」や「物体」のように、物そのものに焦点を当てるのではなく、むしろそのものが与える《存在感》を指示しているからであると考えられる。

『日本語語感の辞典』(中村 2010)では、「物質」の項に、「固体を連想しやすい『物体』に対し、液体や気体も含めた連想が強い。」とあり、「物体」の項にも、「『物質』が構成要素、『物体』はその構成物という図式を思わせる。液体も気体も含まれる『物質』と違い、この語は固体を連想させる。」とある。ここでも、主に両者の違いに重点が置かれ、「物質」が複合名詞では《有害性》を含意する機会が多いことや、「存在」が名詞として用いられるときには、肯定的な語が共起することなどの指摘は、どの辞書にも見当たらなかった。

4 意味的韻律をもたらず認知的メカニズム

3.1 節では、「行為」と共起する語彙に付随する《不法性》や、「活動」が複合名詞として用いられるときに付随する《社会的有用性》などの意味的韻律が存在することを明らかにした。

「行為」の「為」という文字は、「作為」「人為」にも含まれており、自然にそうだったのではなく、人が、意志を持ってわざと行ったものであるということを実際させる語に使われている。このことが、その行為の結果に対する行為者の責任を問う感覚を無意識に付随させることから、《不当性》を伴う語と共起しやすいという説明が考えられる。

同様に、「活動」の「活」という文字は、「活気」「活発」の「活」であり、生き生きとした気分を伴うから良いことに用いられるといった説明も可能であろうが、いずれも、心理学的な証拠や、語史的な裏づけがあるわけではない⁶。

3.2 節では、「現象」と共起する形容名詞に付随する《理解不能性》や、「事態」を主辞とする複合名詞が有する《緊急性》と、「事態」「状況」「状態」を修飾する形容名詞に共通する《深刻性・異常性》、あるいは《困難さ・悲惨さ》などについて論じた。後者は、「定常状態は言及不要」という共通の語用論的動機付けによって説明できると主張した。さらに、外的な「状況」を修飾する形容名詞は負の

意味に限定され、内的な「状態」はそうではないということにも触れた。

また、3.3節では、「物質」に付随する《有害性》や、「物体」に付随する《不気味さ》が概念の抽象性そのものからもたらされている可能性を指摘した。これに対し、「存在」には《存在感》に由来する肯定的な意味が付随していることも明らかにした。

では、このような共起傾向は、繰り返し使用されることにより慣習化され、その結果、話者の態度を含んだ形でスキーマ化されていると考えてよいのだろうか。すなわち、「行為」という語は、行為者の責任を問う場面で用いられることが多いために、《不当性》を含んだ語彙とともに拡大単位 (augmented unit) として慣習化されていると考えられるべきであろうか。

個々の複合名詞は、定着度はさまざまであっても、一つの言語単位として認定してよいだろう。その際、前項語彙に《不当性》や《社会的貢献性》などといった価値評価的な意味を含んだ要素が、頻度においても、多様性においても十分に存在すれば、そのような態度を含んだかたちでより一般化したスキーマが形成されると考えるのが自然である (Langacker 2001)。

さらに、このようなスキーマが存在する背景には、指示表現の情報伝達と話者の事態認知評価に関わる、より一般的な認知的メカニズムが作用していると考えられる。

岡本 (2010) は、レトリック表現の認知プロセスを考察する中で、指示表現に上位カテゴリーを表す名詞が用いられた場合に働く、シネクドキ・リンクの機能について、興味深い指摘を行っている。具体的には、

- (1) 人の顔色をうかがってはいはダメだ。
- (2) 人の気も知らないで。

(岡本 2010 の例文(36)(37))

というような例文で、人間一般を表す「人」という名詞が、他人や自分を指す場合がある。このような場合に、「他人は人である」や「自分は人である」という自明なシネクドキ・リンクをあえて含意することで、他人や自分が相手にとって「人間」という対等な存在であることを印象付け、「その意味である種の強い一般化を迫る表現である」(ibid, p.196) と論じている。

この例文と同じ意味を、「人間の顔色をうかがってはいはダメだ。」とか「人間の気も知らないで。」

とは言い換えられないことから、これらの言い回しは「ひと」という語と結びついて慣習化した表現であろうが、一般に、指示表現において、シネクドキ・リンクが話者の事態認知を前景化する要因として機能することがあるということは言えるであろう。

本稿で取り上げた、さまざまな抽象的な概念を表す漢語名詞も、単独での使用 (すなわち、ある行為を指示するために、それを「行為」と呼ぶことなど) に情報的な価値はほとんどない。このことが、聞き手 (読み手) に対して、複合語を構成する前項要素や、修飾語に焦点をあてさせ、話し手の事態認知を前景化させる要因のひとつとなっていると考えられる。このとき、複数存在する漢語名詞の中から、特定のものを選択することで、特定の態度を伝えるということが、無意識のうち慣習化されているのである。

また、岡本 (2010) は、以下の例文 (3) のように、社会的に明示化することが忌避されるような事柄についても一般化のシネクドキ・リンクが用いられることも指摘している。

(3) 複数の女性と関係を持つ

(岡本 2010 の例文(39))

この例文は、いわゆる婉曲表現であるが、性的な関係が「関係」一般の一種であるという話者の見立ては、「いま・ここ」で行われたものではなく慣習化されたものであるために、前景化せず、「シネクドキの間接性そのものがメッセージの一部を構成している (ibid, p196)」と論じられている。このような慣習的なシネクドキでは、話者の事態認知は聴者と共有された知識の一部となっており、字義通りの発話とほとんど変わらない認知プロセスを経て理解されることも述べられている。

本稿で取り上げた名詞の中にも、「性行為」「わいせつ行為」「排泄行為」「生理現象」などの婉曲表現があるが、数はそれほど多くない。これらの表現は、具体的な表現が社会的なタブーとされるために、あえて情報を与えないように、抽象的な上位概念を表す語が用いられるものである。例文 (3) では「女性と」という項が果たしていた、タブーの婉曲表現であることをほのめかすための情報が、複合名詞の前項によって担われているのである。

5 おわりに

本稿では、いくつかの抽象的な概念を表す漢語名詞の無意識的な使用の偏りについて述べた。概

念を抽象化するという事は、情報を捨てることに他ならない。その情報の捨てる方は、われわれが意識して選択するものではなく、経験を繰り返すなかで一貫しているものだけが自分の中に組み込まれるということである。そのようにして身につけた、情報を捨てる経験の感触のようなものは、意識することはできないが、大量のデータを観察することで明らかにすることができる。その感触の裏返しとして表に現れたものこそが、本稿で述べた意味的韻律である。言語を獲得するという事には、このような感触を身につけるといふことが含まれている。

本稿が明らかにした現象から見えてくるのは、なんとかしてこの世界を理解しようとして格闘している人間の姿である。今までに経験したことのない「現象」には《不思議さ》を感じることで、説明や理由付けを求め、また、世界には《有害な》「物質」が存在するし、《困難》で《深刻》な「事態」や「状況」に満ちていると感じるから何とか制御する必要がある。突然に襲ってくる《予測不可能》な「事態」や、《わけのわからない》「物体」には無意識に不快感を抱く。また、人間の意志的な「行為」には、結果に対する責任を負わせることによって、社会的秩序を維持しなければならない。さらに、《社会に貢献する》組織された「活動」を通じて、よりよい社会を構築してゆく必要がある。

われわれは、制御されていない不安定な認知環境に生きるのは難しい。そこで、安定した秩序によって世界は支えられているという感覚（制御幻想）を生み出すための社会装置が存在している。その一つが法的秩序であり、偶然の世界に起こるある種の出来事を、犯罪として定義し、意味のあるものにする事で、社会の秩序を乱す《不法な》「行為」を糾弾する。

しかし、実際には、制御できないさまざまな要因がわれわれの生活を司る。前節の最後に触れた、社会的タブーもその一例である。タブーの対象は性、暴力、排泄など、人間の中の自然である。本来は予測不可能であり制御できない自然を、タブーによって隠すことにより、コントロールされているとみなすのである。

これらはいずれも「こうすればあなる」という安心感を得るために無意識のうちに行われることである。養老(2008)は、予測と制御を志向するこの傾向を「都会人思考原則」と呼び、これこそが、ヒトの意識の重要な機能であるとしている。言語使用には、こうした人間の意識が「無意識に」行う思考傾向が深く埋め込まれているのである。

このような言語使用における無意識の傾向が、直感（内省）に基づいては得られないことは、本稿の結果がどの辞書にも記載されていないことから明らかであろう。大規模なコーパスデータをコンピューターで分析することによって、用法基盤モデルとしての認知言語学の既存の理論に客観的な裏付けを与えるのみならず、新しい事実を発見することができるのである。その可能性は、無限に開かれている。そうして得られた結果が、認知言語学の理論の更なる発展を促し、新しい視点をもたらすという再帰的な繰り返しが行われることが望まれる。

注

1. Stewart (2010)は、この専門用語の由来や研究史について詳しく論じている。また、この概念の多面性に対する批判的考察については、Whitsitt (2005) や Hunston (2007) も参照のこと。
2. この結果、たとえば「動作」が対象語彙である場合には、「陽動作戦」という語が、誤って分割され、直前に「陽」があるとして抽出されてしまう。このような例は集計後に手作業で除去した。また、本稿で「形容名詞」と呼んでいる品詞は、今回使用した茶釜のバージョンでは「名詞 - 形容動詞語幹」という品詞名であり、それに特殊活用をする助動詞「だ」の体言接続形「な」が接続したものととして解析される。また、調査対象語彙の直前の形態素の品詞が「名詞性接尾辞」である場合（「～的」、「～性」など）は、その接尾辞が付加されている名詞を含めて抽出した。
3. ここで「名詞」と呼んでいるものには、「な」を伴わない形容名詞も含まれている。以下では、便宜的に形容名詞が「な」を伴わずに複合名詞構文に現れた場合は「名詞」と呼び、同じ語が「な」連体修飾構文に現れた場合に「形容名詞」と呼ぶ場合がある。また、形容名詞を記載する際には、「不当行為」と「不当な行為」を区別するために、「な」連体修飾構文に現れた場合には、「な」という形態を付した形で表示する。
4. Nは名詞、NNは複合名詞、A J Nは形容名詞、A Nは連体修飾構文をそれぞれ表す便宜的なラベルである。（A J）Nは、複合名詞前項には形容名詞が出現しうることを表している。
5. 「当該物質」は、15例中14例が『フロン』という題名の書籍に出現しているが、この本のサブタイトルは、「地球を蝕む物質」であり、指示対象は《有害性》を含んでいる。

6. 2011年2月のニュースで、日本の調査捕鯨が、狂信的な環境保護団体シーシェパードの「妨害活動」により中止に追い込まれたことが頻りに報じられている。今回調査したコーパスに、「妨害活動」は3回出現している。このほか、「破壊活動」(28)「非合法活動」(7)など、反社会的な「活動」も、全体に占める割合はごくわずかではあるが存在する。したがって、単純に「活動」自体が肯定的な意味を含んでいるとはいえないが、目的を持った組織的な行動であるという特徴は共有されており、このことが、間接的に肯定的な語彙の共起傾向をもたらすと考えられる。

参考文献

- 上原聡 (2007) 「認知語形成論」, 上原聡・熊代文子『音韻・形態のメカニズム』(講座認知言語学のフロンティア第1巻)第4章, 研究社.
- 岡本雅史 (2010) 「レトリックが照らす認知とコミュニケーションの相互関係」, 崎田智子・岡本雅史『言語運用のダイナミズム』(講座認知言語学のフロンティア第4巻)第5章, 研究社.
- 国立国語研究所の言語コーパス整備計画 KOTONOHA 「モニター公開データの内容」, Online at http://www.ninjal.ac.jp/kotonoha/ex_8.html. 大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所.
- 中村明 (2010) 『日本語 語感の辞典』岩波書店.
- 西尾実, 岩淵悦太郎, 水谷静夫 (編) (2009) 『岩波国語辞典 第七版』岩波書店.
- 松村明 (編) (1995) 『大辞林 第二版』三省堂.
- 松本裕治, 北内啓, 山下達雄, 平野善隆, 松田寛, 高岡一馬, 浅原正幸 (2003) 「日本語形態素解析システム『茶筌』version2.3.2 使用説明書」, 奈良先端科学技術大学院大学 情報科学研究科 自然言語処理学講座.
- 山口昌也 (2007) 「全文検索システム『ひまわり』利用者マニュアル. ver.1.3」, 大学共同利用機関法人 人間文化研究機構 国立国語研究所.
- 養老孟司 (2008) 『養老孟司の人間科学講義』ちくま学芸文庫.
- Hunston, S. (2007) Semantic prosody revisited. *International Journal of Corpus Linguistics*, 12(2) 249-268.
- Hunston, S. and Francis, G. (1999) *Pattern Grammar: A Corpus-driven Approach to the Lexical Grammar of English*. John Benjamins.
- Lakoff, G. (1987) *Women, Fire, and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*. University of Chicago Press. (池上嘉彦・河上誓作他(訳)1993『認知意味論: 言語から見た人間の心』紀伊國屋書店)
- Langacker, R. (2001) Discourse in Cognitive Grammar. *Cognitive Linguistics*, 12(2), 143-188.
- Louw, B. (1993) Irony in the text or insincerity in the writer? The diagnostic potential of semantic prosodies. In M. Baker et al. (eds) *Text and Technology: In Honour of John Sinclair*. John Benjamins, 157-175.
- Partington, A. (1998) *Patterns and Meanings: Using Corpora for English Language Research and Teaching*. John Benjamins.
- Sinclair, J. (1996) The search for units of meaning. *Textus*, 9, 75-106.
- Stewart, D. (2010) *Semantic Prosody: A Critical Evaluation (Advances in Corpus Linguistics 9)*. Routledge.
- Stubbs, M. (1995) Collocation and semantic profiles: On the cause of the trouble with quantitative studies. *Functions of Language* 2(1), 23-55.
- Stubbs, M. (2001) *Words and Phrases: Corpus Studies of Lexical Semantics*. Blackwell.
- Taylor, J. R. [1989] (2004) *Linguistic Categorization*. Third edition. Oxford University Press. (辻幸夫・鍋島弘治朗・篠原俊吾・菅井三実(訳)2008.『認知言語学のための14章 第三版』紀伊國屋書店.)
- Whitsitt, S. (2005) A critique of the concept of semantic prosody. *International Journal of Corpus Linguistics*, 10(3), 283-305.

<abstract>

Semantic Prosodies Attendant on Japanese Nouns of Chinese Origin

Representing Abstract Concepts

Akira OISHI

Meisei University

This paper investigates Japanese nouns of Chinese origin which represent abstract concepts such as 'BUSSITSU (substance)' or 'KOUJI (act)'. The concepts represented by these nouns lie at the top of the concept hierarchy. Therefore, according to logical reasoning, we might suspect that the nouns were transparent in meaning and were used neutrally because they should include all subordinate concepts located lower in the concept hierarchy.

However, the results obtained by examining a large-scale electronic corpus showed a surprising polarization in their evaluative meaning. Most of the nouns co-occur typically with other words that belong to a particular semantic class. This phenomenon is referred to as *semantic prosody*, which describes the way in which certain seemingly neutral words can come to carry positive or negative associations through frequently occurring with particular collocations (Louw 1993, Stubbs 1995, Partington 1998, Sinclair 1996, Hunston and Francis 1999).

We examined four nouns for each of the three broadest categories: "action", "state", and "thing". As for "action" category, the collocates of the four nouns are analyzed: 'KOUJI (act)', 'KOUDOU (behavior)', 'KATSUDOU (activity)', and 'DOUSA (action)'. When 'KOUJI' is used as a head of a compound noun or modified by an adjectival noun, the noun preceding it tends to carry *illegality* except when it is used as a technical term in the administrative or legal area. On the other hand, 'KATSUDOU' is habitually associated with a favorable expression such as 'keizai (economy)', 'borantia (volunteer)', etc. and characterized by a semantic prosody of *contribution to society*. Other two nouns do not show such negative or positive associations.

The nouns included in "state" category are 'GENSYOU (phenomenon)', 'JITAI (situation)', 'JOUKYOU (state of affairs)', and 'JUTAI (state)'. 'GENSYOU' is associated with a semantic prosody of *incomprehensibility* while 'JITAI' is associated with a semantic prosody of *emergency*. In addition, 'JITAI', 'JOUKYOU' and 'JUTAI' are all similarly modified by adjectival nouns which represent *seriousness* or *difficulty*. These results can be explained by the pragmatic principle that a steady state need not be mentioned.

As for "thing" category, 'BUSSITSU (substance)', 'BUTTAI (object)', 'JIBUTSU (things)', and 'SONZAI (being)' are examined. 'BUSSITSU' constitutes compound nouns with collocates that imply *noxiousness* and 'BUTTAI' is associated with a semantic prosody of *weirdness*. These results are brought about by the abstractness of the concepts they represent. On the other hand, 'SONZAI' carries a positive association through the collocates which represent *centrality* or *representativeness*. This is because 'SONZAI' refers to the presence felt by others rather than things themselves.

The fact that these abstract nouns have little informational value in their own meaning makes hearers (readers) to focus on the preceding nouns, which function as a factor to foreground speakers' (writers') construal of the events described in the sentences.